

シンポジウム報告

第 11 回都城制研究集会

都城と交通

2017年2月11日(土)

毎年恒例で第11回目となる都城制研究集会の今年度のテーマは「都城と交通」。都城というかたちで国政の拠点が設けられると、そこは全国規模の交通の中心となります。都城を核にどのような交通が展開し、それは人の意識や社会にいかなる変化をもたらしたのかという問題意識の下、官人や人々の移動、それに伴う物や情報の移動・流通を多角的にとりあげ、さらに都城をめぐる道や祭祀なども視野に入れ、8名の報告者を迎えてシンポジウムを行いました。報告内容等は次の通りです。

館野報告は、都城へ向かう税や仕丁・衛士の動きをあげ、そのなかで諸地域からの人々の交流を通じて生じた情報の伝播とその影響を論じました。積山報告は、難波京をめぐる交通路の具体相を探り、さらに天武紀に見える大津道が、推古朝に隋使来朝に備えて整備された「大道」と述べました。山近報告は、歴史地理学の立場から、人形や人面墨書土器を用いた祭祀が都城の交通路上の結節点で行われたことなどを考察しました。三好報告は、平城京の「都城形土師器」について、都市的消費市場の形成に伴う生産体制の確立と、「ふり売り」による広範な商品流通の側面を指摘しました。

鈴木良章報告は、恭仁宮や近江・伊賀国府との往来の利便性、東日本との物資輸送路整備の容易性から、紫香楽に離宮が設けられたと主張しました。鈴木久史報告は、地方産瓦と尾張産緑釉陶器を分析し、それらが天皇家政機関や貴族層と国司との関係を軸に平安京に流通したことを論じました。穴戸報告は、文献史料から遷都時における京戸の新京への移動状況を分析し、さらに新京周辺における大規模な口分田割り替えなどに論及しました。最後に尾山報告は、

『万葉集』に見えるミチについて、道・路・径という3種の字は多くの場合重なる意味を有しつつ、それぞれ独自の用法があることを明らかにしました。

全報告の後、報告者同士で議論を展開しました。交通をめぐる論点が多岐にわたることが改めて浮き彫りになり、今後も学際的議論の必要性を感じました。参加者は約120名。今回の開催にあたっては、学内外の多くの研究者・機関のお世話になりました。報告者をはじめシンポジウム開催にご尽力いただいた方々に、感謝申し上げます。本研究集会の報告内容は、『都城制研究(12)』(2017年度刊行予定)に掲載の予定です。

報告

都城と交通

館野和己(古代学学術研究センター)

難波京と難波大道・大津道

積山 洋((公財)大阪文化財研究所)

都城と祭祀

山近久美子(防衛大学校)

都へのモノの移動

三好美穂(奈良市埋蔵文化財調査センター)

紫香楽宮造営の意図と遺物からみた地域交流

鈴木良章(甲賀市教育委員会)

平安京における地域交流

鈴木久史(京都市文化財保護課)



都城制研究集会での三好報告のようす

遷都時における京戸の移動

宍戸香美（奈良女子大学博士研究員）

『萬葉集』における「ミチ」

尾山 慎（奈良女子大学）

討論司会：出田和久（古代学学術研究センター長）

前川佳代（古代学学術研究センター）

進行：西村さとみ（奈良女子大学）

（館野和己）

第12回若手研究者支援プログラム

漢字文化の受容

—東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式—

2016年8月21日（日）～22日（月）

第12回若手研究者支援プログラムが2016年8月21日と22日の2日間にわたり、古代学学術研究センター主催、奈良県立万葉文化館及び科学研究費基盤研究B「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明」（代表：信州大学 西一夫）との共催で開催されました。「漢字文化の受容—東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式—」をテーマとして、日本と中国の手紙—現実に交わされた書状とその模範文例である書儀—とに着目し、それらの表現や形式を比較検討することを通して、日本における漢字文化の受容のあり方を考察しました。第1日目は公開講演会、第2日目はシンポジウム。参加はのべ約170名。報告集を2017年3月に刊行しました（本誌6ページ参照）。

第1部 公開講演会 8月21日（日）

於 奈良県立万葉文化館。約110名参加
手紙の作法—書儀の実践・応用

講師 山本孝子（京都大学非常勤講師）

書の筆法から見る木簡・尺牘の世界

講師 河内利治（大東文化大学教授）



公開講演会において講演する河内利治氏

第2部 シンポジウム 8月22日（月）

於 奈良女子大学、約60名参加。

『杜家立成雑書要略』の書儀的表現

西 一夫（信州大学教授）

書状と公文—正倉院文書の書状をめぐる—

奥田俊博（九州女子大学教授）

写経生・実務担当者の選択—「啓」という書式を選

ぶ時— 桑原祐子（奈良学園大学教授）

古文書と古往来—日本の書札礼の周辺—

乾 善彦（関西大学教授）

全体討論 司会：奥村和美（奈良女子大学教授）

（奥村和美）



シンポジウムでの全体討論のようす
（左より乾氏、桑原氏、奥田氏、西氏）

調査報告

台北・故宮博物院所蔵

銅造大日如来坐像

岩田茂樹（センター特任教授／奈良国立博物館）

2016年12月19日から22日までの日程で、中華民国（台湾）の首都台北に所在する国立故宮博物院（写真1）ならびに国立歴史博物館を訪れる機会を得た。主たる目的は、両館の所蔵する中国仏教彫刻の調査である。筆者の専攻する日本彫刻史の立場からすると、その源流を探る試みということになる。もっとも故宮博物院といえば、汝窯青磁に代表される陶磁器や、肉形ない白菜形に象られた精巧な玉細工などのイメージが強いのだろうし、国立歴史博物館の収蔵品のメインは、大陸・河南省からもたらされた青銅器や陶俑の名品である。この両館に、仏教彫刻を常設展示するコーナーがあることは、あまり意識されていないのではないだろうか。今回はこのうち故宮博物院に収蔵される一作品を紹介してみた



写真1 台北・国立故宮博物院

い。

故宮博物院の第一展覧エリア（本館）1階の101展示室が、中国金銅仏の展示室である。展示作品は30点程にすぎないが、時代的には北魏から明代に及び、またチベットや雲南（大理国）制作のものも含まれる。いずれもきわめて優秀な作行きだが、実はこれらは、近年、個人コレクターから故宮に寄贈されたものがかなりの割合を占め、なかには北魏・大和元年（477）銘の仏坐像のような著名作品も含まれる。しかし、ここで取り上げる大日如来坐像（写真2）については、あまりその存在が注目されたことはないように思う。以下、かんたんに説明しよう。

螺髪を表すが、肉髻の頂には螺髪がなく、半球状の突起を表す。肉髻と地髪との境界は明瞭な段差を設けず、その正面の部位に花飾りを表す。目は目頭・目尻ともに少し下向きにうねる。衲衣を通肩に着け、胸もとを少し寛げる。衲衣の縁は各所において縁を折り返す。袖は大腿部下に引き込まれ、脚下の裙と

同化している。両手首に腕釧を着ける。体正面中央に両手先をかまえ、智拳印を結ぶ。右脚を外に半跏趺坐する。膝下から前面にかけて地付回りに着衣が広がる。

鑄バリないしその痕跡が認められないので、蠟型による一鑄かと思われる。肉身・着衣を問わず輝きの良い鍍金がよく残るが、頭髪部には緑青錆が目立つことから、ここは鍍金ではなく彩色（群青か）を施していたことが推測される。

さて本像が中国での制作であることは認めてよいだろう。智拳印を結ぶ大日如来像だが、日本であれば菩薩形となるべきところ、本像は如来の服制である。肉髻頂の半球状の突起や、地髪との境に表された花飾り、手首に着ける腕釧なども、日本における図像上の伝統とは異なる。

しかしそれにもかかわらず、本像を目にした筆者は懐かしいものに邂逅したような感覚を覚えた。日本の平安時代中期の仏像に近い作風を見いだせる気がしたからである。

肉髻と地髪との段差を明瞭に表さない頭部、切れ長でうねりの強い目、卵形の頬、奥行きのある上体だが両腋を凹ませ、胴と腕との分節をはっきり見せる点、ゆったりと張った安定感ある脚部、高い膝頭、組んだ足首が腹部の方に深く入り込むところなど、まさに10世紀後半から11紀初頭頃の日本の作例に通ずる。もっとも、全体として本像に酷似する作例が日本にあるというより、上に列挙した諸特徴のうち幾つかを共通させる作品群が存在するというのが正しいだろう。

またこの像の表現上の特徴のひとつに、両脚頭周



写真2 大日如来坐像 銅造・鍍金 国立故宮博物院

辺に衣文を表さず、肉身の張りを強調することがあげられるが、これは平安時代を通じて、白描画像の影響を受けたと見られる密教彫像にときおり見いだすことができる。

展示室に掲げられたキャプション(説明書)では、宋時代(960～1279)の作と表記されていた。北宋なのか南宋なのかの判断も避けられており、いささかアバウトに過ぎる説明だが、この像における立体表現の完成度は、北宋・南宋いずれの作例をも凌駕し、唐代の遺風さえ感じさせる。

飛鳥から平安時代初期までの日本の仏像が、常に中国大陸からの影響下に展開したことはあらためていうまでもなからう。教科書的な記述では、寛平6年(894)に遣唐使が廃止されたことが契機となり、平安時代後期におけるいわゆる国風文化の成立を促したという。京都・平等院鳳凰堂の定朝作阿弥陀如来像を代表とする和様彫刻の成立も、そのような文脈でとらえられるのがふつうである。しかし遣唐使の廃止後も大陸からの文物の将来が途絶したわけではない。公的使節の派遣こそなくとも、貿易船を仲立ちとして、人的ないし物的な交流は持続されていた。その結果、これまで国内における自立的展開と把握されてきた和様の彫刻や絵画に、実は大陸からの精神的・物質的両面の文化的影響を看取しうることが、最近の研究で明らかにされつつある。本像は、このような近年の論点に関連しうる重要な作品と考えられるだろう。今後の研究の進展に期待したい。

学術講演会報告

平城京調査研究の成果と課題 —発掘調査成果の意義—

講師：佐藤 信(東京大学)

2017年2月2日(木)

かつて奈良国立文化財研究所において平城宮跡の発掘調査に関わられた佐藤信先生(日本古代史)にご講演いただきました。内容は以下のようなことでした。

平城京については世界でも希有な、精密で高度なレベルの発掘調査が行われています。その背景には明治期の棚田嘉十郎・溝辺文四郎の保存運動や、1960年代以降の近鉄車庫、国道24号線バイパスの建設計画に伴う国民的文化財保存運動により、宮跡等が保存されてきたことがあります。そして、奈

良国立文化財研究所を中心とする調査によって、8世紀の王宮や都市の実像が明らかにされたことは、古代史や都市史に大きな達成をもたらし、世界文化遺産の登録にも影響しました。

このなかでも長屋王邸宅の調査、木簡群の出土等はひとつの到達点といえます。例えば、長屋王家木簡に長屋王が天皇の兄弟や皇子に限られる「親王」の号で記されていたことは、王が有力な皇位継承候補であったことを示唆します。また、王邸には家政機関や工房のほか医師・女医を置く薬師処など様々な機関があったことが明らかになりました。王邸で働く人々に毎日支給されていた食米の帳簿である米飯支給木簡が大量に発見されたことで、そのような末端にいたるまでの多様な階層・職種の人々の様相を知ることができました。

講演中、本センターの都城制研究会が古代都市の実態解明に寄与し、今後も成果が期待されると言及がありました。最後に平城京研究の課題について巨大な消費・生産やそれらに伴う流通、人口集中による公権力の必要と確立やその変遷、都市民衆の実像の解明など、例を挙げて整理されました。

(宮崎良美)

研究会報告

古代学学術研究センター 月例研究会

本センターに参加する学内外の様々な学術分野の研究者が相互の研究内容を理解し、学際的研究を推進する基盤を作るために、月例研究会を開催しています。2016年度は次の通り開催しました。

5月18日(水) 鈴木明子(センター協力研究員)

王権の論理と仏教—聖徳太子と舒明天皇—

6月22日(水) 宮崎良美(センター協力研究員)

大和条里の地割に関するGIS的検討の試み

7月6日(水) 館野和己(センター特任教授)

御食国若狭の再検討

8月3日(水) 藤田盟児(生活環境学部)

上代用語にみる上下の空間概念について

10月12日(水) 大平幸代(文学部)

「桃花源記」を読みなおす—六朝における山水中の異空間、山に分け入る人々

12月14日(水) 宮路淳子(文学部)・六車美保(文学部・研究員)・的場美帆(同)

女高師時代の教材 正倉院模造宝物と古文書写真乾板

学際的共同研究体制に基づく
タンパク質考古学創成事業との連携

環境歴史分野の活動報告

国内外の共同研究のうち、国内では奈良県立橿原考古学研究所と行った「武者塚古墳出土品のタンパク質科学的分析」が研究報告書にまとめられました。7世紀頃の武者塚古墳から出土した髪の毛からはヒトのケラチンを、馬具のような遺物からはウシとシカのコラーゲンをそれぞれ検出しました。国外の考古資料については、エジプト政府考古省が関係するNPO法人「太陽の船(クフ王第二の船プロジェクト)復元研究所」から依頼のあった出土試料の膠着材の分析を始めました。

環境歴史分野の研究成果は、ほぼ毎年アメリカ質量分析学会(ASMS)で発表しています。第64回ASMS(2016年6月)では、筑波大学、国立西洋美術館、および大阪大学とのバーミヤンの彩色壁画片に関する共同研究の成果を発表しました。この学会で知り合ったManchester大学(英国)のMichael Buckley博士と、2017年度から動物の骨に関する共同研究を開始します。10月からは、名古屋大学博物館の門脇誠二・講師との共同研究「プロテオミクス技術による旧石器時代動物骨の分析」が始まり、2017年4月には新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の公募研究として採択されました。

連携研究協定については、筑波大学との協定期間を4年間延長しました。奈良文化財研究所、東京文化財研究所との協定も、人員等の変更を考慮し、2017年4月から再開する予定です。このように研究が深化・発展していく中で、カビなどの微生物についての専門家として文化財保護の研究で環境歴史分野に大きく貢献してこられた鈴木孝仁名誉教授が3月15日に逝去されました。ここに謹んで鈴木先生を偲び、ご冥福をお祈りします。

(中沢 隆)

協力研究員の活動から

当センターでは日本史や文学・国語学を中心に多様な研究テーマをもった研究者を協力研究員として受け入れています。2016年度の協力研究員について①専門分野、②センター受け入れ研究課題、③主な研究成果を中心に紹介します。(氏名五十音順)

黒田洋子①日本古代史 ②書状文化の源流を求めて—正倉院文書から見た日本古代における書状文化の諸相 ③『国家珍宝帳』に見える「王羲之書法廿卷」の性格(国史研究142)ほか

阪口由佳①上代文学 ②上代文学における表記と表現—生と死にかかわる場面を中心に ③古事記「市辺之忍齒王の難」の構想(萬葉223)ほか

鈴木明子①日本古代史 ②推古朝と聖徳太子 ③王権の論理と仏教—聖徳太子と舒明天皇—(古代学9)

樽井由紀①日本民俗学 ②風土記を中心に古代人の娯楽という観点から、温泉の歴史を探る ③仏教寺院の温泉、共同浴への影響(佛教学歴史学論集平成28年度)ほか

樋口百合子①①上代文学・中世文学 ②『歌枕名寄』の成立・継承・影響について—所収萬葉歌から— ③「中世名所歌集にみる『万葉集』長歌の享受と特質—細川本『歌枕名寄』を中心として—(上代文学117)ほか

久岡明穂①日本近世文学 ②日本書紀の江戸期における享受 ③『日本書紀』と『椿説弓張月』(第13回広域古典研究会、2016.08.25)

前川佳代①日本中世史・日本考古学 ②本学構内遺跡からみた12世紀外京北部の景観／12世紀外京北部の景観と都市平泉の比較 ③「12世紀外京北部の景観(『中世都市研究会奈良大会』2016資料集)ほか

宮崎良美①人文地理学 ②奈良盆地の条里地割に関する検討—GISを利用して ③奈良盆地における条里地割の地域的差異について(第59回歴史地学会大会口頭発表2016.06.04、共同発表)ほか

森由紀恵①日本中世史 ②日本古代末期～中世成立期の都市と宗教 ③「『覚禅鈔』データベースの構築」(第22回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集)

楊莉①敦煌学・中国語学 ②敦煌書儀の注釈と研究 ③敦煌書儀の写本について(「王羲之書簡」研究会口頭報告、2016.07.03)ほか

刊行物案内

2017年3月、『古代学』第9号、『都城制研究』(11)、『第12回若手研究者支援プログラム報告集』を刊行しました。

『古代学』第9号

中沢隆：カイコガの種で見る日本の古代養蚕史—古代の文献史料から家蚕と天蚕を読み取る—／大平幸代：劉裕の北伐をめぐる文学—晋宋革命を演出した人とことば—／西川ゆみ：庾信の「見る詩」について—樂府的表现の利用と改変—／中川明日佳：中臣宅守の隔絶表現を持つ歌にみる表現意識—「関」を中心に—／鈴木明子：王権の論理と仏教—聖徳太子と舒明天皇—／樋口百合子：翻刻 大同薬室文庫蔵『歌枕名寄』（上）

『都城制研究』(11)

館野和己：日本古代都城の造営—問題提起として—／神野恵：平城宮周辺の造営工事—佐伯門前と朱雀大路門前の事例から—／佐藤亜聖：平城京造営と造営集団について／池田裕英：平城京東市の造営と東堀河の掘削／市川創：難波宮・京の設計と実際／西森正晃：長岡・平安宮の造営の実態／奥村和美：『萬葉集』にみる都造り

『第12回若手研究者支援プログラム 漢字文化の受容—東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式—報告集』

山本孝子：手紙の作法（さほう・さくほう）—書儀の實踐・應用／河内利治（君平）：書の筆法から見る木簡・尺牘（せきとく）の世界／西一夫：『杜家立成雜書要略』の書儀的表现／奥田俊博：書状と公文—正倉院文書の書状をめぐる—／桑原祐子：写經生・実務担当者の選択—「啓」という書式を選ぶ時—／乾善彦：古文書と古往来—日本の書札礼の周辺—

退任・退職のご挨拶 センター長 出田和久

この度、2017年3月31日をもちましてセンター長の任期を終るとともに奈良女子大学を退職することとなりました。2015年4月に前センター長の館野和己氏からバトンを受け継ぎ、些か心許ないなかでの船出であったことが思い起こされます。幸い館野氏には特任教授としてセンターに残っていただくことができ、また運営委員各位をはじめ関係の方々のご助力の御蔭で2年間センター長の職を務めることができました。これまでのセンターの各種活動を支えて下さった皆様方に心より感謝申し上げます。

振り返りますと、センターは21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」の成果を継受し、日本古代史をはじめ考古学・地理

学・文学など学際的なセンターとして発足し、新たに理系との融合を目指しプロテオミクス研究の考古学への応用を図る環境歴史分野が加わりました。この2年の間にも、COE以来継続している若手研究者支援プログラムおよび都城制研究集会を開催し成果を上げるとともに、さらに環境歴史分野では国内外の調査研究機関との共同研究等を行ない、着実に実績を積み上げてきています。また、センターの情報発信という側面ではWeb-GISでの奈良盆地歴史地理データベースの公開・充実が行なわれ、さらに研究機関誌『古代学』と『都城制研究』の刊行、若手研究者支援プログラムの報告集の新規刊行、月例研究会・講演会の開催、あるいはNewsletterのWEB発信と様々な取り組みを積み重ねてきました。

このようにセンターが多種多様な活動を実施して成果を挙げることができているのは、センター職員はもとより、センターの諸活動に直接的あるいは間接的に関わり協力下さった多くの方々のお蔭であることは言を俟ちません。改めて関係の皆様方に御礼申し上げます。

研究集会等のテーマを設定することは、案外エネルギーを要します。その上、10回を超えて恒例となった感があるがゆえの難しさもあると思いますが、関係者の方々の創意と工夫に期待し、今後とも奈良にある大学における古代学研究的センターにふさわしい刺激的なテーマを取り上げ、さらに研究活動を充実させるようにと願っています。

編集後記

Newsletter No.9をお届けします。2016年10月に特任助教に復職し、奈良盆地歴史地理データベースの充実、第11回都城制研究集会の開催、研究紀要等の編集に携わり、Newsletterの発行まであっという間に過ぎたように感じます。3月末で任期満了のため退職します。在職中お世話になった皆様により感謝申し上げます。（宮崎）

奈良女子大学古代学学術研究センター

Newsletter No. 9

2017年3月31日発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 205号室

TEL/FAX：0742-20-3779

URL：http://www.nara-wu.ac.jp/kodai/index.html

e-mail：kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp

編集：出田和久・宮崎良美